

## ヴィトゲンシュタイン後期思想における「言葉の絵」

京都大学 木本蒼

### はじめに

本稿の目的はヴィトゲンシュタインの後期思想に見られる「言葉の絵 Bild des Worts」<sup>(1)</sup>を概念として取り出し明確化することで、それを通じて彼の言語論における両義性を描き出すことである。

彼の後期思想には、言葉に対するイメージの感覚が有する重要性を肯定したり否定したりするという両義性が看取され、その点で、心理主義的にも行動主義的にも映る。一方で、言葉の意味を規定するものとして語感を絶対視する場合、心理主義の立場となる。他方で、「感覚」という「心的なもの」(PU I-427)の存在を否定し、言葉の個々の「使用」のみを認めるとき、心的なものを「行動」という外的なものの傾向性に還元する行動主義の立場となる。本稿で論じるように、実際にヴィトゲンシュタイン後期哲学における記述は行動主義的な解釈と高い親和性を有しているようにも見え<sup>(2)</sup>、言葉の「イメージ Bild」は往々にして、疑似哲学的な問題を引き起こす原因であると解釈される<sup>(3)</sup>。それに対して、「Bild」をこのように専ら否定的に理解するのではなく、むしろ当該概念に対する否定と肯定というヴィトゲンシュタインの両義的な態度に光を当てた解釈が可能であるというのが本稿の立場である。

本稿の構造は以下の通りである。まず第1節では言葉の「絵」とは何かについて規定を与え、第2節で心理主義と行動主義という対立軸から、「絵」に対するヴィトゲンシュタインの両義的態度を浮き彫りにし、そして第3節で彼の哲学における「絵」の存在の扱われ方について規定を与える。その際、第1節では肯定的な規定（「絵」とは何であるか）が行われるのに対して、第3節では否定的な規定（「絵」の存在はどのようなでないか）のみが与えられるが、これは本稿の考察の不十分さを示すものではなく、むしろここで扱っている問題がさらなる発展の可能性を秘めたものであることを示唆している。

### 第1節 「絵」の言語論：いくつかの肯定的規定

第1節では「言葉の絵」という概念についての肯定的な規定を与えたい。まず「Bild」概念を分類し、次にPUやBPPの節から「絵」の具体的な特徴づけを行い、最後に当該概念に対するヴィトゲンシュタインの態度に見られる両義性を指摘して第2節の考察に接続する。

#### 1.1 「言葉の絵」と「Bild」の分類

本稿の中心に位置する「言葉の絵」という表現は、まずもって次の節に依拠している。

しかし文 *Satz* が言葉の油絵 *Wortgemälde* のように思われ、そして文のなかの個々の言葉 *Wort* が絵 *Bild* のように思われるなら、分離されて目的なく発せられた言葉も特定の意味 *Bedeutung* をそれ自身のうちに有しているように見えても、もはやさほど不思議なことではない。(PU II-xi(\*267))

この節の直前では「感情を込めて」、「表現力豊かに *ausdrucksvoll*」読まれた言葉は「意味で満たされている」という感覚や体験が論じられており(\*264~5)、このような文脈に位置していることから、上の節の「言葉の絵」も言語使用者が感知するものであると推察される。イーガンは「*Bild*」概念の多様な用法を、①「文字通りの像 *literal pictures*」、②「心的像 *mental pictures*」、そして③「概念的な像 *conceptual pictures*」に分類する(Egan 2011: pp.56~7)。①はウサギ＝アヒルの頭の像(PU II-xi(\*118))のように描かれた図形のことであり、②は特に BPP 第二部前半で頻繁に看取される「視覚印象 *Gesichtseindruck*」のことであり(BPP II-111 等<sup>(4)</sup>)、いずれもここで問題となっている言葉の「意味」に関連する「*Bild*」とは異なるため、「言葉の絵」とは③「概念的な像」に該当する<sup>(5)</sup>。この意味での「*Bild*」の例としては、193~4 節における「〔特定の〕働き方の象徴」として用いられる「機械のイメージ」についての議論で登場する「*Bild*」が挙げられるだろう。

イメージとして与えられる「言葉の絵」は、後に論じる箇所にあるように「我々の目の前に浮かび」、「精神のなかで雰囲気を持つ」(PU II-vi(\*35))ものであり、語に対するある種の感覚として理解される。ところでヴィトゲンシュタインは、言葉の意味はその使用であって(PU I-43)、体験において与えられたものではないと考えており、それゆえ、もし「言葉の絵」が通常の語感と同義であるとするなら、これは彼の哲学において批判対象とされるものであり、上記の引用箇所も皮肉として言われているに過ぎないことになる。これに対して本稿では、「絵」は私秘的な体験にすぎない通常の語感とは異なり、それゆえヴィトゲンシュタインの言語観から排除されていないことを示したい。

## 1.2 肯定的規定

以降「言葉の絵」が「顔 *Gesicht*」や「相貌 *Physiognomie*」と言い換えられ、言葉の意味 *Bedeutung* を構成し、一定の統一性 *Einheitlichkeit* を有することを示したい。BPP 第 I 部においてヴィトゲンシュタインは次のように述べる。

どの言葉 *Wort* も——と言いたくなるのだが——確かに様々な文脈において様々な性格を持つのだが、しかしそれはやはり常に一つの性格 *einen Charakter* を持つ。——つまり一つの顔 *Gesicht* を。…実際に、どの言葉も小さな顔である…と想定することができる。そしてさらに、文全体がある種の絵のグループ〔集合写真〕*Gruppenbild* であり、複数の顔の視線がそれらのあいだの関係をもたらし、全体においてそうして一つの有意義な *sinnvoll* グループが与えられると想定できる。(BPP I-322, 強調原文, 〔〕内引用者, 以下同様)

これは BPP の一節であり（前半部分は PU II-vi(\*38)と重複する）、先ほど「言葉の絵」の典拠として引用した PU の節から位置的に離れているが、内容は類似している。つまりこの節では一つの言葉が「顔」で一つの文が「集合写真」であると言われ、前の節では一つの言葉が「絵」で一つの文が「言葉の油絵」であると言われており、「顔」と「絵」のどちらも我々が言葉に対して抱く特別な感覚を表現している。そして「絵」においてと同様「顔」も、次の引用文で言われるように、言葉の意味 *Bedeutung* に関係する。

言葉の見慣れた顔 *Gesicht*、言葉は謂わばその意味のイメージ *Bild seiner Bedeutung* であるという感覚 *Empfindung*、その意味を謂わば自身のうちに取り込んでしまった〔という感覚〕——これらすべてがないような言語が存在するかもしれない。…(BPP I-6)

この文の最後の箇所は、翻って、我々の言語における、言葉の絵がその意味を表すという感覚の存在をヴィトゲンシュタインが認めていることを示唆する。その際、言葉の「意味」とは、辞書で列挙されるようなバラバラのものではなく、先ほどの「一つの性格」という表現や次の節から明らかなように、ある統一性を有している。また彼は次のようにも述べる。（この節は上記二つからは離れた位置にあるが、言葉が「顔」を有するというポイントが一

貫していることから、同じ論点に関する節として理解できる。)

そして君は、これらすべての語の使用 **Wortverwendungen** においてやっぱり一つの顔 **ein Gesicht**、一つの統一的な、本当の概念 **einen einheitlichen, echten Begriff** を見ている、と言いたくはならないのか？  
…(BPP II-221)

言葉の「絵」・「顔」は、第一に「統一的 **einheitlich**」であり、第二に言葉の「意味 **Bedeutung**」を表すという特徴を有する。次に引用する二つ節において登場する「相貌 **Physiognomie**」という別の用語は、以上の二つの特徴を共有するため、同じく「絵」の言い換えであると推察される。

ここで、〔言語使用の〕技術 **Technik** が我々にとって一つの相貌 **Physiognomie** を有するということは、もちろん重要である。我々がたとえば統一的 **einheitlich** な使用や、統一的でない使用について話すことができるということは〔重要である〕。(BPP II-299)

英語の „this “, „that “, „these “, „those “, „will “, „shall “ などの使用を例にとってほしい。これらの言葉 **Wörter** の使用の規則を与えることは困難だ。だがその使用を理解することは可能であり、そうすると君は次のように言いたくなる。「一度、これらの言葉の意味 **Sinn** に対する正しい感覚 **das richtige Gefühl** を有したなら、これらを使うことができる」。つまり、そうしてこれらの言葉に、英語における独特な意味を帰することができるのだ。その使用は謂わば一つの相貌 **eine Physiognomie** として感じられる。(BPP I-654)

たとえば我々は指示詞コ・ソ・ア（「これ」「それ」「あれ」など）を指示対象との距離に応じて（ドイツ語の指示詞には見られない仕方）使い分けているが、それらの使用規則を一義的な仕方を与えることは困難である。しかし、日本語に習熟した者はそれぞれの指示詞に対して「〔一つの〕正しい感覚」を有しており、その感覚によってこれらの言葉を正しく使用する。「相貌」あるいは「言葉の絵」は一方で言語使用者によって感じ取られる点で私秘的だが、それが統一的な仕方の意味を表す点で公共的であり、体験内容のみに関

わるたんなる語感とは異なる。

ヴィトゲンシュタインは同音異義語の「habe」（動詞「持つ haben」の一人称単数形）と「Habe」（「所有物」を意味する名詞）がそれぞれ異なる「顔」を持つと議論するが(BPP I-328)、その際彼はこれらの単語を別々の仕方で感じるという言語使用者の「まったく自明な表明 Äußerung」は、一方では「語の理解 Verstehen der Worte」という一般的な（あるいは公共的な）事柄に関連するが、他方ここではそれが「純粹に個人的な表明の光の下で」（つまりは私秘的な仕方で）現れていると述べる。彼は「私秘性」「公共性」という術語こそ用いていないが、言語におけるこの二つの奇妙な共存を意識していたものと推察される。

### 1.3 両義的態度

以上をまとめると次のように言えるだろう。一方では、周知のとおり言葉の「イメージ」は、疑似哲学的な問題の原因として批判の対象となり、BPP I-526 では常に顔を感じているという感覚が疑問に付されるなど、しばしば「絵」に対する否定的な態度が看取されるが、他方では、この「Bild」は完全な幻想として扱われているわけではなく、むしろ我々の言語におけるこの感覚の存在を前提とする肯定的な態度も見られる(BPP I-6)。彼の態度にはこのような両義性が看守されるのである。

本稿は「言葉の絵」に対するヴィトゲンシュタインの態度の両義性の背後に、彼の哲学における心理主義の否定と行動主義の否定という二つの動きがあると考える。第2節では彼の哲学における心理主義と行動主義の扱われ方について考察したい。

## 第2節 心理主義と行動主義

以降では、まずヴィトゲンシュタイン哲学のなかに心理主義に対する批判と行動主義の否定という両義的な態度が見られることを「絵」を通じて明らかにし、次にこの両義性をウィリアム・ジェイムズに対する評価と批判という観点から掘り起こしたい。

### 2.1 心理主義の否定・行動主義の否定

言葉が「絵」を持つという考え方に対してヴィトゲンシュタインが距離を取る理由は、一つには、「感覚が存在しないところで、感覚を実体化したがる」（PU I-598）という我々の傾向性から、我々が「絵」や「顔」の存在を常に体験していると誤って思い込む危険があるからであり(BPP I-526)、もう一つ

には、言葉の絵の強調によって実際の多様な用法が度外視されるからである。

ある一つの絵が呼びだされる。一義的に意味を定めているように思える絵だ。だが、その絵の実際の使い方は、その絵が予め指示する使い方と比較すると、不純になってしまったもの *etwas Verunreinigtes* であるように見える。… (PU I-426)

純粹で統一的な「絵」を前にするとき、「一般性への渴望」(BB p.17)に突き動かされて我々は、多様性を忘却した安易な本質主義に陥ってしまう。使用場面から分離した形で「感覚」を実体化し、それによって言葉の「意味」を定義づけるような心理主義 *Psychologismus* の考え方に対して、ヴィトゲンシュタインは批判的な態度を取っており、そのため彼は言葉の「絵」の存在に対する無条件な肯定からは距離を取る。

他方で、ヴィトゲンシュタインは、心理主義の正反対である行動主義を支持しているわけではない。ジョリーはヴィトゲンシュタインにおける「心理主義 *psychologism*」の問題について、「心理学化〔心を心理主義的に扱うこと〕の拒否によって…ヴィトゲンシュタインは疑わしくも行動主義者であるかのように見える——あたかも内的領域の存在 *existence of the inner realm* をもろとも否定しているかのように」(Jolley 2010: p.113~4)と述べており、ヴィトゲンシュタインの議論における心理主義の否定が行動主義の肯定と高い親和性を持つと考える。彼を行動主義者として解釈することは、ラックハートが指摘するように (Luckhardt 1983: p.319)、ヴィトゲンシュタイン解釈においてともすれば陥り易い考え方であり、またローティは、多くのヴィトゲンシュタイン主義者たちが心的／物的の存在論的区別の批判によって、「伝統的な行動主義との好ましからざる同盟 *an uneasy alliance*」を結ぶに至ったと述べる (Rorty 1977: p.169)。以上の論者が指摘するような、ヴィトゲンシュタインのテキスト内に看取される傾向性を考慮に入れるなら、「絵」の実体化・固定化という心理主義に対する彼の批判は、心的なものを外的なものへと還元する行動主義に与していると解釈を誘うものであるという本稿の想定は謂われなきものではないだろう。

「絵」に対するヴィトゲンシュタインの態度の両義性の背後には、心理主義の否定と行動主義の否定という彼の哲学における両義性が見え隠れしている。「心理主義」が感覚という内的なものを重視する「絵」の無条件の肯定であるのに対して、逆に「行動主義」とは、言語を用いた個々の「行動」の存

在のみを認め、言葉の「絵」は言語使用者の幻想だとする「絵」の全き否定である。心理主義が絵の神格化（偶像崇拜）であるならば、行動主義は絵の消去主義（無神論）とも呼べるだろう。本節の残りでは、彼が心理主義を否定する動機を参照することで、絵の神格化にも消去主義にも与しない解釈の可能性を見出したい。

## 2.2 ウィリアム・ジェイムズ批判

ジョリーはヴィトゲンシュタインの心理主義批判をフレーゲによる影響という観点から考察しているが(Jolley 2010: p.110)、本稿では別の思想的背景、つまりウィリアム・ジェイムズによる影響を考察したい。本稿第1節において言葉が絵を持つとする BPP I-6 を引用したが、グッドマンによれば、絵のない言語を表すこの節の後半の「魂 Seele の不在の言語」という表現は、ジェイムズの『心理学の諸原則』から借用された用語である(Goodman 2002: p.134; 邦訳二五六頁)。また、PU II-vi(\*39~46)で展開される「もしもの感覚」（その直前には本稿第1節で引用した BPP I-322 と内容面において重複する PU II-vi(\*38)が位置する）についての議論の典拠は同様にジェイムズにある(Goodman 2002: pp.75~; 邦訳一三二~四頁)。

ここから絵に対するヴィトゲンシュタインの態度の一側面（否定的側面）の背後には、ジェイムズの記述に見え隠れする「[言葉の]意味とは、ある微妙な過程であり、私たちが経験する何かである」（同上, p.130; 邦訳二二八頁）という考えに対する批判があるのではないかという推測が生じる。我々は、ヴィトゲンシュタインが直接的に言葉の絵の存在を否定していると解釈するのでも、またその存在を無条件に肯定していると解釈するのでもなく、絵の存在をジェイムズ的な仕方で肯定することを否定していると考えべきである。つまり「内省」という方法を用いる経験論的な立場(同上, pp.68~9; 邦訳一二一頁)から、私秘的な体験に限定されたものとして絵を扱うことを否定しているのである。

そこでヴィトゲンシュタインの絵の扱い方を、以上とは区別された仕方で特徴づけるといって課題が生じる。グッドマンは「経験と文法」という区分を援用しており(同上, pp.70~; 邦訳一二四~頁)、またジョリーも基本的に「文法」という概念によってさしあたりの特徴づけを行っている(Jolley 2010: p.144)。それに対して本稿では、「文法」という手ごろな用語による肯定的な規定ではなく、まずは否定的な規定を行うことで既存の考察方法との差異化を図りたい。

### 第3節 「絵」の存在論：いくつかの否定的規定

これまで本稿では、絵の肯定的規定から出発し（第1節）、この概念に対するヴィトゲンシュタインの態度の両義性の背景に、彼の哲学上の態度における両義性があることを指摘した（第2節）。そこで第3節では、絵の存在について、彼の哲学全体という文脈からどのような規定が可能かを考察したい。以降、まず絵の起源（絵は「どこから」生じるのか）について、次に、絵の存在領域（絵は「どこに」存在するのか）について否定的な規定を与え、最後にそこから肯定的な規定を与える可能ないくつかの道のりを示す。

#### 3.1 絵の起源

さて、言葉の絵の起源、つまりそれは如何にして生じたかという観点から考察するとき、ヴィトゲンシュタインの哲学はどのような道のりを示しているか。この問いが有益であるのは、それによって彼とジェイムズとの相違が歴然となるからである。終始、両者の類縁性を証明しようと試みているグッドマンは、感情が生理学的な考察方法と並んで「歴史 history」の観点から究明されるべきであるとする『心理学の諸原則』の議論を引用したうえで、「ここでジェイムズは、生活形式の歴史的文化的な構成要素を認めているのだが、…〔この承認は〕またウィトゲンシュタインも『探究』においてすることとなる」（Goodman 2002: p.111 邦訳一九五～六頁）と述べており、言語と「自然誌 Naturgeschichte」——自然な「必要性 Bedürfnis」の下に成立する人間の社会的・生物学的な生活のあり方（PU I-25）——との連関を示唆する。グッドマンのこのような立場からすれば、絵の起源の問題に対して肯定的な回答——つまり、「絵」は人間の社会的・生物学的な進化の過程における自然な「必要性」から発生したという説明——が可能であるということになり、この場合、その起源は科学的な探究によって明かされることだろう。

だが、ヴィトゲンシュタインは自身の探究が因果関係に基づく現象を扱う自然科学的な探究とは異なることを明言しており（PU I-109）、また次のように述べている。

概念の形成が自然の事実から説明できるのなら、我々が興味を持つべきなのは文法ではなく、自然において文法の基礎となっているものではないだろうか？ …しかし我々の興味は、概念をつくりそうな原因に戻ったりはしない。我々は自然科学をやっているわけではない。自然誌をやっているわけでもない。…（PU II-xii (\*365)）

この自然科学的な言語論とヴィトゲンシュタインの言語論はしばしば混同され、言語の議論は自然誌の議論に還元されてしまう。(実際、認知言語学の主要なテーゼの一つである「プロトタイプ理論」は、ヴィトゲンシュタインの家族的類似性という考え方(PU I-67)に着想を得て構築されたものであり(Croft & Cruse 2004: p.77)、「絵」の概念に非常に類似している(6)。)だが、自然科学的な考察が「絵」を固定的に捉える一方で、ヴィトゲンシュタインは「絵」を生み出したとされる特定の自然誌に固執することもなく、「絵」と自然誌との因果的な関係づけを行うこともない。上述のように言葉の絵に対する彼の批判的な態度の理由は、絵に対する通常の語感のような経験論的な探究、つまりジェイムズの自然科学的な考察態度(Goodman 2002: pp.64~; 邦訳一三~頁)に対する反発を背景としている。以上のことを考慮に入れるなら、上記の問いに対する回答は、「絵」の起源を自然的事実に求めてはならないという否定的なものに留めるべきである。

### 3.2 絵の存在領域

次に、「絵」がどのような領域に存在するかという問いについてはどうだろうか。PUでは、概念の存在はどのように扱われているか。たとえば著作の冒頭に目を向けると、そこでは「赤いリンゴ 5 個」というメモに基づいておつかいをするという言語使用が描かれており、その際、メモを渡された店主は「カラーサンプリング」を使って「赤」を見つけ、「1、2、3…と 5 まで数える」ことで「5」個の商品を渡す(PU I-1)。ここでのポイントは、「赤」や「5」という言葉の概念的なイメージ、つまりその「絵」は、この日常的な言語使用において捉えられ、そこでは「赤とは何か」「5とは何か」という問いが問題とならないということである。

…「ところで、どこでどうやって『赤』という言葉調べたらいいのか、また『5』という言葉でなにすべきなのかということが、どうやって店の人にわかるのですか?」。——まあ、私としては店の人がいま述べたように行動する、と想定しているのである。説明はどこかで終わるものだ。——ところで「5」という言葉の意味は何か?——そんなことは、ここではまったく問題ではなかった。… (PU I-1)

「5」とはたんなる数詞か、それともイデア的な存在か、「色」とは光の波

長か、それともそれに尽きないものか——これは哲学的な問いである。だが、リンゴを 5 個買うという「言語ゲーム」(PU I-6)では「リンゴ」や「5」、「赤」といった言葉は店主と買い手とのやりとりに「織り込まれて」いるため(同上)、心的事象／物的事象という区分に基づく疑似哲学的問いは、この実践上の「必要」(PU I-108)とは無関係であり、問いそのものが拒絶される。

言葉の「絵」は言語ゲームにおいて使われ、その言語ゲームは心的／物的の区分の上に成立しているわけではない。「絵」は客観的な存在か、主観的な産物か、という二者択一を要求する問いは正面から答えてはならない誘導尋問であり、どちらの回答も退けるという否定的な応答に留めるべきである。

### 3.3 肯定的規定のいくつかの可能性

以上、本節では「絵」の起源と存在領域について性急に肯定的規定を提示することを避け、否定的な形での規定を与えた。では肯定的な回答はどのような道りであれば可能なのか。

一つには、「絵」と「言語」の関係に着目して考察を進める方法が考えられるだろう。起源についての議論では、言葉の「絵」と経験的事実との因果的な関係づけを退けたが、「絵」は言語ゲームと関係しており、その言語ゲームは他の言語ゲームと関係している(BPP I-433 参照)。この関係は因果 *Kausalität* の関係から区別して「連結 *Zusammenhang*」と呼ぶことができる(同上)。このように「絵」とその他の言語ゲーム、ひいては「言語」全体との「連結」を考察する道がある。

またもう一つの方法としては、存在領域についての議論における否定的規定から、「言葉の絵は、日常生活の言語使用で絵が機能する程度に存在している」という仕方で、肯定的規定へと進むことができる。このとき「日常生活」の意味内容の明確化、つまりは「日常性 *Alltäglichkeit*」(PU I-129)概念の解明を模索する道を辿ることになるだろう。

### むすび

本稿では、ヴィトゲンシュタインの後期思想における言葉の「絵」を概念として取り出し、言葉の意味を表す「絵」は私秘的でありながら公共的であると特徴づけ(第 1 節)、この概念に対する彼の態度の両義性を、彼の哲学全体における両義性という広い文脈に位置付け(第 2 節)、絵の存在のあり方についての規定を試みた(第 3 節)。本稿後半では否定的な規定しか与えられなかったが、それは翻って本稿で描き出した彼の思想が、既存とは異なる新しい哲学的な図式を必要とすることを示唆しているとも言えよう。

## 注釈

(1)「言葉の絵」という術語は後述するように PU II-xi (\*267)を典拠とするが、ヴィトゲンシュタイン自身が意識して使っているわけではない。

(2)カベルはヴィトゲンシュタインの哲学には彼を「行動主義者」として誤解させる趣があると指摘する(カベル 1998)。

(3)たとえば Fischer(2006)を参照されたい。

(4)BPP 第 II 部の前半では、想像において思い浮かべられたイメージも、現実に知覚された対象のイメージも、どちらも「内的像 *das innere Bild*」(BPP II-111)である点で本質的に同じであるという哲学上の考え方が批判され、「表象は像 *Bild* ではないし、視覚印象 *Gesichtseindruck* も像ではない」(同上)と主張される。

(5)とりわけ③に含まれる「イラスト化された言い回し *Illustrated turns of speech*」と「着想 *Conceptions*」が、本稿で扱う「言葉の絵」に対応する。だが、前者は主張の像、後者は物の考え方の像であり、PU II-xi(\*267)で述べられるような言葉の「*Bild*」に厳密に対応するものではない。

(6)西村，野矢 2013: 六四～九五頁も参照されたい。

## 文献表

- Croft and Cruse, 2004, *Cognitive Linguistics*, Cambridge University Press
- Egan, David, 2011, "Pictures in Wittgenstein's Later Philosophy", *Philosophical Investigations* 34-1, pp.55-76
- Fischer, Eugen, 2006, "Philosophical Pictures", *Synthese* 148-2, pp.469-501
- Goodman, Russell B., 2002, *Wittgenstein and William James*, Cambridge University Press (邦訳『ウィトゲンシュタインとウィリアム・ジェイムズ プラグマティズムの水脈』嘉指信雄・岡本由起子・大厩諒・乗立雄輝・訳，岩波書店，2017)
- Jolley, Kelly Dean, 2010, "Psychologism and Philosophical Investigations", In Kelly Dean Jolley (ed.), *Wittgenstein: Key Concepts*, pp.109-115
- Luckhardt, C. Grant, 1983, "Wittgenstein and Behaviorism", *Synthese* 56, pp.319-338
- Rorty, Richard, 1977, "Wittgensteinian Philosophy and Empirical Psychology", *Philosophical Studies* 31, pp.151-172

- Scotto, C., 2019, "'Meaning is a Physiognomy" Wittgenstein on Seeing Words and Faces", *Nordic Wittgenstein Review* 8-1, pp.115-150
- Wittgenstein, Ludwig, 1991, *The Blue and Brown Books*, Wiley-Blackwell, 〈邦訳〉大森荘蔵訳(2010)『青色本』, 筑摩書房, 本文中略記号 BB
- , 1984, *Philosophische Untersuchungen*, Suhrkamp Taschenbuch Wissenschaft, 〈邦訳〉丘沢静也訳(2013)『哲学探究』, 岩波書店, 本文中略記 PU
- , 1984, *Bemerkungen über Philosophie der Psychologie*, Suhrkamp Taschenbuch Wissenschaft, 本文中略記 BPP
- S.カベル, 斎藤直子聞き手・訳, 1998, 「日常性への回帰 アメリカの声・私の声」, 『現代思想 vol. 26-1』, 青土社, pp.50-59
- 西村義樹, 野矢茂樹, 2013, 『言語学の教室』, 中公新書
- 古田徹也, 2018, 『言葉の魂の哲学』, 講談社